

米原歴史文化街道

米原市の歴史・文化財を歩く

135

「小堀遠州好み」茶室 燕窓窠 ―長岡・幕末の文化サロン―

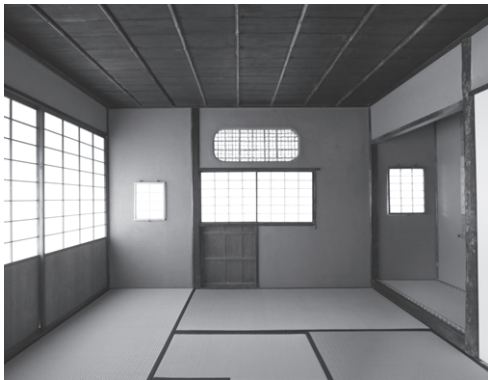
遠州、直弼主膳

長浜市小堀町に生まれ、江戸時代初期の大名茶人であり、建築・庭園・書などの総合芸術家として知られる小堀遠州（一五七九〜一六四七）を流祖とする遠州流の茶室「燕窓窠」が、長岡西福寺に移築復元されました。

遠州流の茶室は、遠州が小堀家小室陣屋（長浜市小室町）に建てた八窓庵（重要文化財）が札幌市中島公園にのこるほか、京都の大徳寺孤篷庵や金地院八窓席などに現存しますが、滋賀県内では燕窓窠が唯一の遺構で、大変重要な建物です。

この茶室（平成二六年市文化財指定）は、江戸時代に長岡村の庄屋を務め、造り酒屋を営んでいた田中家の母屋の北側にありました。建物は茅葺きで、四畳半の茶室と六畳の主室からは、伊吹山が茶庭の借景として望めたそうです。

西福寺先々代住職によると、この建物は江戸末期に彦根藩主井伊直弼が志賀谷高尚館を訪問した折に立ち寄り、休憩し、当主や近隣文化人を集め



▲茶室内部

茶会を催し、和歌も詠んだ迎賓施設だったと伝えられています。高尚館は天保一三年（一八四二）に長野主膳が開いた国学塾で、湖北湖東一円から美濃にかけて一九〇人余りの門弟が集まり、その活動は一一年七か月におよびました。天保一三年、彦根藩主になる前の直弼と出会い、国学・和歌の師として厚い崇敬を受け、後に側近として幕末日本の政局を大きく動かした人物です。今回、敷地内に主膳の歌碑も移設されました。

国友の辻宗範が設計

平成二六年から始められた解体工事「天保九年（一八三八）五月長岡邑住工職細田長治郎」の墨書と、茶室名「燕窓窠」の額（天保一〇年）がみつきり建築年代が分かりました。

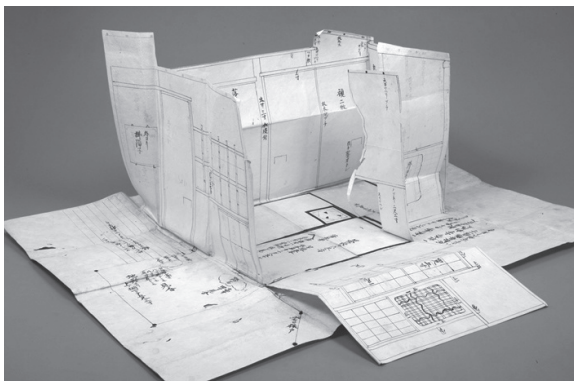
戦後、増改築されていましたが、田中家に伝わる平面図（元治元年（一八六四）明治一五年（一八八二））、解体に伴う柱などの痕跡、さらに「辻宗範先生指図」と記された立体の設計図（天保七年）や窓などの図面（天保八年）があり、建築当時の姿に復元することができました。辻宗範（一七五八〜一八四〇）は坂田郡国友村（長浜市国友町）で生まれ、遠州流茶道の奥義を極めて遠州流中興の立役者になったといわれています。茶室は辻宗範の設計・指導によって建てられたもので、指図に「甫公御好（遠州公好み）」とあることから遠州流様式の茶室であることがわかります。

田中家には辻宗範からの手紙もあり、当時の当主田中真三郎正苗が遠州流茶道を深く学んでいたことが、長岡に茶室がのこされたゆえんです。また正苗は主膳の最初期の門弟で、直弼や主膳の和歌の短冊ものこされています。さらに直弼は、嘉永七年（一八五四）八月一日に、領内巡見で主膳を伴い長岡村日向家に宿泊しています。大名茶人として名高い直弼がこの茶室を利用したことは、巡見の記録の長岡の項に「茶

道奥坊主」とみえることから想定できません。

長岡は田んぼが広がる農村です。しかし、今回の茶室の復元をきっかけにその文化度の高さがクローズアップされました。発注者の田中氏と設計者の辻宗範のつながり、長野主膳を中心にした文化人の集まり、そして井伊直弼。茶室を舞台に、歴史に名をのこす人々が集うサロンがこの茶室なのです。移築復元に取り組まれた西福寺は、正保年間（二六四四〜四七）、田中氏日向氏出身の補巖宗綴和尚・龍溪宗三和尚が再興しました。西福寺のご尽力で再建されたことに深い縁を感じます。

（歴史文化財保護課）



▲起こし絵図(個人蔵)